

# 三重県における異年齢児保育の現在

—鈴鹿短期大学生生活コミュニケーション学研究所共同調査報告—

三重こどもわかもの育成財団

平成25年度 青少年育成調査研究事業

「三重県の保育所における異年齢児保育に関する研究」報告書

平成26年2月

石川 拓次・川又 俊則・山野 栄子・渋谷 郁子  
小島 佳子・松本亜香里・勝間田明子

## 1. 緒言

### 1・1. はじめに

現代の子ども達を取り巻く環境は大きく変化している。子ども達が生活をする最も基本的で最小の構成単位である家族においては、合計特殊出生率も1.4台と低値が続き、少子化の傾向は止まらず、一人っ子の割合も高くなってきている。これらのことは、子ども達の遊び環境にも大きな変化をもたらしている。一昔前、地域の子ども達が集まり、所謂ガキ大将を中心として、異年齢間で遊ぶ光景は随所でみられたものであったが、現在では異年齢の子ども達が一緒に遊ぶ姿はみられなくなってきている。近年、子ども達の体力・運動能力やコミュニケーションスキルの低下が言われて久しいが、このことと無関係とは言えないと考える。このように異年齢間の交流は身体的にも、精神的にも、そして、社会的にも子ども達を成長させる要素を持つのである。（石川：2014）

このように現代ではあまり見る事のなくなった異年齢間の交流であるが、保育所においては一部で異年齢間の交流は行われている。塩路・佐々木は、少子化や地域の教育力の低下が叫ばれている中で、幼稚園や保育所は子どもが異年齢で交流できる重要な場となっており、今後の幼保一体化総合施設においては、いずれにせよ0歳から5歳児までが共に生活する形態が主流になろうと述べている。（塩路・佐々木：2005）

しかし、1997年に行われた日本保育協会の全国調査の報告によると、保育の形態として「異年齢児保育のみ」もしくは、「基本的に異年齢児保育であるが同年齢で保育する場合もある」と答えた割合が約15%であり、「異年齢児保育」が全国的に広がっているとは言えない状況である。三つ子の魂百までと言われるように、幼少期の経験というのはその後の成長に大きな影響を与えるものであり、心身両面だけではなく社会的なコミュニケーションスキルの基礎的な形成にとっても重要な時期であり、異年齢児保育を進めていくことが必要と考える。

一方で、本学が所在する三重県は、南北に長く、そのまわりを西側は鈴鹿山脈などの山々、そして、東や南東部は伊勢湾や熊野灘の海に囲まれ、自然環境が大変豊かな土地である。一般的に三重県は愛知県に隣接している桑名市、四日市市を中心とした北勢地域、伊賀市および名張市を中心とした伊賀地域、県庁所在地がある津市、鈴鹿市を中心とした中勢地域、伊勢市および志摩市を中心とした伊勢志摩地、熊野市および尾鷲市などを中心とした東紀州地域に分けられる。

それぞれの地域で特徴があり、それにより、保育所の状況にも地域による特徴がみられる。北勢地域および中勢地域は、大都市圏である名古屋地域に隣接し、そちらからの人口の流出入も多く、100名を超える大規模の保育所から数10名までの中規模の保育所までさまざま存在する。また、同じ市内でも、市街地と郊外ではその人口に大きな差異があり、保育所の状況も異なる。たとえば、県庁所在地である津市では、2005年（平成18年）に13市町村が合併する大規模な市町村合併が行われた。山間部も津市に入ることにより、市街

地にある120名を超える超大規模の保育所から一桁の園児数の超小規模の保育所までがそれぞれの地区に存在している。一方で、伊賀地域や東紀州地域は、少子化、過疎化の流れは止まらず、幼児の在籍数が10名以下の保育所も数多い。このように、三重県では、その地域性なども関係し、それぞれの保育所でさまざまな特徴がみられる。その中で異年齢児保育においても保育所の特徴として行っている施設もある。

そこで今回、三重県全域の保育所の施設長、主任保育士およびクラス担任保育士を対象に異年齢児保育に関する質問紙調査およびインタビュー調査を行い、三重県における異年齢児保育の現状についての基礎的な資料を得る目的で本研究を行った。（本報告書では、施設長および主任保育士の質問紙調査の結果を中心に述べていく）

## 1・2. 異年齢児保育の歴史的変移

次に異年齢児保育に関する諸家の報告について概観する。宮里は、様々な事例と自らの経験に基づいて異年齢児保育を2つに大別している。1つは、「同年齢でクラス編成ができるけれども異年齢で保育する『理念的異年齢児保育』」であり、もう1つは、「同年齢ではクラス編成の不可能な『条件的異年齢児保育』」である。（宮里，2001）また、坪井らは、所属幼稚園での2年間の実践記録をもとに、年少児どもは年長児どもに対してあこがれや目標をもち、逆に年長児は年少児に対して優しく対応することを通して、自信をつけるといった異年齢児保育の持つ意味や影響について考察している。（坪井他，2005）

異年齢児保育は、この言葉の他にも「縦割り保育」や「混合保育」との呼び方で実施されている。それぞれの言葉で微妙に意味が異なっている。たとえば、縦割り保育は、1980年発行の『幼児保育学辞典』にて、「明確な意図を持って異年齢の幼児集団を構成し、保育を行うこと。単に園児数や職員数、施設等の制約で異年齢の幼児を同一クラスで指導する混合保育と区別されている。」と説明されている。一方、混合保育について、村山は、「①異なった年齢の幼児をやむを得ず一緒に保育すること。縦割保育が積極的に行われるのに対して、やむを得ず行う場合にこの言葉を使うことが多い」「②1つの学校（組）に1つの年齢という枠を取っ払い、異なった年齢の幼児を意図的に混ぜて保育すること。縦割保育。解体保育」と述べている。（村山，1980）

また、1983年発行の『保育学大事典 第2巻』では、秋山が縦割り保育について、「縦割り保育は、できるだけ広範囲の異年齢の子どもを1つのグループ、あるいは、1つのまとまりとして活動させることによって、年齢の異なる成員相互の間に、同年齢集団の成員間に起きるものとは異なった保育効果を期待して行われる保育である」と述べている。（秋山，1985）

さらに、1985年発行の『乳幼児発達事典』では、舟木が縦割り保育について、「異年齢の幼児を一緒にした保育のこと」と述べ、混合保育について、「異年齢の幼児を混合して、学級（組）を組織し行う保育のこと。混合保育は、幼児数が少ないなどのやむを得ない場

合に行うことが多いが、ときに、それとは別の理由で行うこともある。なお、混合保育が思わぬ効果をあらわすこともあるが、もともと混合保育は積極的な意図を持たない場合が多い」と述べている。(舟木, 1985) つまり、この3つの事典において、縦割り保育は、宮里のいう「理想的異年齢児保育」に対応し、混合保育は、「条件的異年齢児保育」に対応する用語であると言える。この時点では、異年齢児保育という言葉は、どの事典にも出てきていない。

しかし、1990年以降の事典や資料には「異年齢児保育」という言葉が数多く登場する。2004年発行の『保育用語事典 第3版』では、異年齢児保育について、異年齢児相互のかかわりに積極的な意味を見出している用語として解説される。(田代, 2004) 一方で、藤森は、異年齢児保育を、3歳以上の子ども達を3人の保育者でみる形態とし、習熟度別、提案型の活動内容から子ども達が自由に選択する保育を提唱している。(藤森, 2000)

このように異年齢児保育は、縦割り保育、混合保育と様々な呼び方がされ、それぞれの理念で展開されているが、実際には、先述した日本保育学会の調査にもあるように、一部で実践されている保育所は多いものの、基本的に異年齢児保育を行っている施設は数少ない。異年齢児保育が広がらないことについては、様々な要因があるものと考えられる。

## 2. 方法

### 2・1. 対象

対象は、三重県内の公立および私立の保育園425施設であった。その内241施設より回答を得た。回収率は、56.5%であった。各市町村別の配布数、回収数および回収率を表1に示した。三重県の北勢地域、中勢地域、甲賀地域、伊勢志摩地域および東紀州地域の全地域の保育園から回答を得た。

表1. 市町村別配布数および回収数(回収率)

地域	市町村	配布数			回収数			回収率		
		公立	私立	合計	公立	私立	合計	公立	私立	合計
北勢	いなべ	7	3	10	2	0	2	28.6%	0.0%	20.0%
	亀山	9	5	14	2	3	5	22.2%	60.0%	35.7%
	桑名	9	17	26	6	7	13	66.7%	41.2%	50.0%
	菰野	6	0	6	3	0	3	50.0%		50.0%
	四日市	25	25	50	23	7	30	92.0%	28.0%	60.0%
	川越	3	1	4	2	1	3	66.7%	100.0%	75.0%
	朝日	1	0	1	1	0	1	100.0%		100.0%
	東員	6	0	6	3	0	3	50.0%		50.0%
	木曽岬	2	0	2	1	0	1	50.0%		50.0%
	鈴鹿	10	30	40	9	12	21	90.0%	40.0%	52.5%
伊賀	伊賀	21	15	36	16	13	29	76.2%	86.7%	80.6%
	名張	6	4	10	5	2	7	83.3%	50.0%	70.0%
中勢	松阪	22	14	36	9	4	13	40.9%	28.6%	36.1%
	多気	5	0	5	4	0	4	80.0%		80.0%
	津	26	31	57	25	19	44	96.2%	61.3%	77.2%
	明和	3	1	4	3	0	3	100.0%	0.0%	75.0%
伊勢志摩	伊勢	14	16	30	12	8	20	85.7%	50.0%	66.7%
	玉城	4	0	4	4	0	4	100.0%		100.0%
	志摩	14	2	16	3	1	4	21.4%	50.0%	25.0%
	鳥羽	9	0	9	5	0	5	55.6%		55.6%
	度会	3	0	3	2	0	2	66.7%		66.7%
	南伊勢	8	0	8	6	0	6	75.0%		75.0%
東紀州	紀宝	5	0	5	0	0	0	0.0%		0.0%
	紀北	1	6	7	1	1	2	100.0%	16.7%	28.6%
	熊野	9	2	11	7	0	7	77.8%	0.0%	63.6%
	御浜	4	0	4	1	0	1	25.0%		25.0%
	大紀	5	0	5	2	0	2	40.0%		40.0%
	大台	4	0	4	0	0	0	0.0%		0.0%
	尾鷲	7	8	15	1	5	6	14.3%	62.5%	40.0%
総計	248	180	428	158	83	241	63.7%	46.1%	56.3%	

## 2・1・1. 調査I【施設長調査】

施設長調査は、三重県内の公立および私立保育園の施設長、もしくは施設の状況を最も把握している方425名を対象とし、241名（男性16名、女性220名、不明4名。平均年齢56.1±6.3歳）から回答を得た。回収率は、56.5%であった。倫理的な配慮として、郵送した質問紙調査にこの調査の趣旨および目的および方法の説明文書を同封し、了解を得た。

回答者の概要を表2-1に示した。役職は、施設長190名（78.8%）、副施設長10名（4.1%）、主任26名（10.8%）、その他7名（2.9%）、そして、不明8名（3.3%）であった。

年齢構成は、20歳代1名（0.4%）、30歳代4名（1.7%）、40歳代21名（8.8%）、50歳代179名（74.6%）、60歳代23名（9.6%）、70歳代4名（1.7%）、80歳代1名（0.4%）、そして、不明8名（3.3%）であった。

保育士経験年数は、10年未満9名（3.7%）、10年以上20年未満14名（5.8%）、20年以上30年未満23名（9.5%）、30年以上40年未満161名（66.8%）、40年以上50年未満7名

(2.9%)、50年以上1名(0.4%)、そして、不明26名(10.8%)であった。

施設長経験年数は、5年未満166名(67.5%)、5年以上10年未満33名(13.8%)、10年以上20年未満10名(4.2%)、20年以上30年未満9名(3.8%)、そして、30年以上5名(2.1%)であった。

表2-1. 回答者概要(施設長)

役職	N	施設長	副施設長	主任	その他	不明			
	241	190	10	26	7	8			
	100.0%	78.8%	4.1%	10.8%	2.9%	3.3%			
性別	N	男性	女性	不明					
	241	16	220	5					
	100.0%	6.6%	91.3%	2.1%					
年齢	Ave±S.D.	56.1±6.3歳							
年齢構成	N	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代	不明
	241	1	4	21	179	23	4	1	8
	100.0%	0.4%	1.7%	8.7%	74.3%	9.5%	1.7%	0.4%	3.3%
保育士経験年数	Ave±S.D.	32年11ヶ月±8年9ヶ月							
保育士経験年数構成	N	10年未満	10年以上20年未満	20年以上30年未満	30年以上40年未満	40年以上50年未満	50年以上	不明	
	241	9	14	23	161	7	1	26	
	100.0%	3.7%	5.8%	9.5%	66.8%	2.9%	0.4%	10.8%	
施設長経験年数	Ave±S.D.	5年5ヶ月±6年7ヶ月							
施設長経験年数構成	N	5年未満	5年以上10年未満	10年以上20年未満	20年以上30年未満	30年以上	不明		
	193	143	27	6	7	2	8		
	100.0%	74.1%	14.0%	3.1%	3.6%	1.0%	4.1%		

## 2・1・2. 調査Ⅱ【主任保育士の調査】

主任保育士の調査は、三重県内の公立および私立保育園の主任の方を対象とし、234名(男性0名、女性222名、不明12名。平均年齢48.9±7.2歳)から回答を得た。回収率は、55.1%であった。倫理的な配慮として、郵送した質問紙調査にこの調査の趣旨および目的および方法の説明文書を同封し、了解を得た。

回答者の概要を表2-2に示した。年齢構成は、20歳代5名(2.1%)、30歳代16名(6.8%)、40歳代84名(35.9%)、50歳代114名(48.7%)、60歳代1名(0.4%)、そして、不明14名(6.0%)であった。

保育士経験年数は、10年未満12名(5.1%)、10年以上20年未満36名(15.4%)、20年以上30年未満90名(38.5%)、30年以上40年未満80名(34.2%)、40年以上50年未満2名(0.9%)、そして、不明22名(6.0%)であった。

主任経験年数は、5年未満173名(73.9%)、5年以上10年未満24名(10.3%)、10年以上20年未満11名(4.7%)、20年以上30年未満3名(1.3%)、30年以上1名(0.4%)、そして、不明22名(9.4%)であった。

表2-2. 回答者概要(主任)

性別	N	男性	女性	不明			
	234	0	222	12			
	100.0%	0.0%	94.9%	5.1%			
年齢	Ave±S.D.	48.9±7.2歳					
年齢構成	N	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	不明
	234	5	16	84	114	1	14
	100.0%	2.1%	6.8%	35.9%	48.7%	0.4%	6.0%
保育士経験年数	Ave±S.D.	27年0ヶ月±8年3ヶ月					
保育士経験年数構成	N	10年未満	10年以上20年未満	20年以上30年未満	30年以上40年未満	40年以上50年未満	不明
	234	12	36	90	80	2	14
	100.0%	5.1%	15.4%	38.5%	34.2%	0.9%	6.0%
主任経験年数	Ave±S.D.	4年3ヶ月±7年8ヶ月					
主任経験年数構成	N	5年未満	5年以上10年未満	10年以上20年未満	20年以上30年未満	30年以上	不明
	234	173	24	11	3	1	22
	100.0%	73.9%	10.3%	4.7%	1.3%	0.4%	9.4%

## 2・2．調査方法

### 2・2・1．調査用紙の作成

本調査では異年齢児保育を「3～5歳児が、異なる年齢クラスの子ども（乳児クラスを除く）と同じ空間・時間を共有する保育のこと。早朝保育や延長保育は含まない。」と定義した。この定義をもとに、研究グループで調査用紙を作成した。

#### 2・2・2・1．調査項目【施設長調査】

施設長対象の質問紙調査用紙を資料1に添付した。本調査用紙は3つのカテゴリからなる。1つ目として、回答者自身に関すること、2つ目として、勤務先の施設に関すること、そして、3つ目として、異年齢児保育に関することである。

回答者自身に関することとして、性別、年齢、保育士経験年数、現勤務地での勤務年数、そして、役職およびその役職になってからの年数について尋ねた。

勤務先の施設に関することとして、年齢別在籍児数、職員数、保育室数、園庭面積、特徴的な施設・遊具、施設開設年、そして、実施行事について尋ねた。

異年齢児保育に関することとして、異年齢児保育実施状況、場面別異年齢児保育実施状況および異年齢の組み合わせ区分、導入時期、導入経緯および理由、異年齢児保育を行うにあたっての工夫点および留意点、そして、異年齢児保育についての考えである。回答は、それぞれの項目で、選択式もしくは記述式とした。

#### 2・2・2・2．調査項目【主任調査】

主任対象の質問紙調査用紙を資料2に添付した。本調査用紙は4つのカテゴリからなる。1つ目として、回答者自身に関すること、2つ目として、異年齢児保育の実施状況に関すること、3つ目として、異年齢児保育の経験に関すること、そして、4つ目として、異年齢児保育に対する考え方に関することである。

回答者自身に関することとして、性別、年齢、保育士経験年数、現勤務地での勤務年数、そして、主任経験年数について尋ねた。

異年齢児保育の実施状況に関することとして、異年齢保育実施状況、実施形態、場面別異年齢児保育実施状況および異年齢の組み合わせ区分について尋ねた。

異年齢児保育の経験に関することとして、異年齢児保育経験の有無、実施形態、異年齢組み合わせ区分、そして、実施時の留意点および工夫点について尋ねた。

異年齢児保育に対する考え方に関することとして、異年齢児保育の必要性について、その理由、異年齢児保育の長所・短所、そして、その他として異年齢児保育について日ごろ感じていることを尋ねた。回答は、それぞれの項目で、選択式もしくは記述式とした。

## 2・3．調査期間

調査は、平成25年9月下旬に郵送法および直接法にて配布し、9月26日から11月17日まで回収がなされた。

### 3. 結果（施設長用）

#### 3・1. 保育所概要

##### 3・1・1. 年齢別性別在籍園児数

年齢別性別園児数を表3に示した。0歳児の男児は、 $2.6 \pm 2.8$ 人、女児は、 $2.2 \pm 2.7$ 人、合計 $4.9 \pm 4.9$ 人であった。1歳児の男児は、 $6.1 \pm 4.6$ 人、女児は、 $5.8 \pm 4.5$ 人、合計 $11.8 \pm 8.2$ 人であった。2歳児の男児は、 $7.9 \pm 5.3$ 人、女児は、 $7.6 \pm 5.1$ 人、合計 $15.5 \pm 9.8$ 人であった。3歳児の男児は、 $11.0 \pm 10.7$ 人、女児は、 $9.7 \pm 6.3$ 人、合計 $20.7 \pm 14.9$ 人であった。4歳児の男児は、 $10.7 \pm 8.9$ 人、女児は、 $9.7 \pm 6.3$ 人、合計 $20.4 \pm 13.4$ 人であった。5歳児の男児は、 $11.3 \pm 11.8$ 人、女児は、 $9.6 \pm 6.7$ 人、合計 $20.8 \pm 16.1$ 人であった。

全体の合計は、男児 $49.6 \pm 33.3$ 人、女児 $44.7 \pm 25.6$ 人、合計 $94.3 \pm 55.9$ 人であった。3歳児～5歳児は、男児 $33.0 \pm 25.1$ 人、女児 $29.0 \pm 17.0$ 人、合計 $62.0 \pm 39.0$ 人であり、3歳児～5歳児比率は、 $66.3 \pm 11.6\%$ であった。

表3. 在籍園児数

	0歳児			1歳児			2歳児		
	男児	女児	合計	男児	女児	合計	男児	女児	合計
N	226	226	226	226	226	226	226	226	226
合計数	577	506	1,100	1,377	1,322	2,670	1,794	1,719	3,513
平均値	2.6	2.2	4.9	6.1	5.8	11.8	7.9	7.6	15.5
標準偏差	2.8	2.7	4.9	4.6	4.5	8.2	5.3	5.1	9.8
	3歳児			4歳児			5歳児		
	男児	女児	合計	男児	女児	合計	男児	女児	合計
N	226	226	226	226	226	226	226	226	226
合計数	2,484	2,196	4,680	2,420	2,196	4,616	2,549	2,163	4,712
平均値	11.0	9.7	20.7	10.7	9.7	20.4	11.3	9.6	20.8
標準偏差	10.7	6.3	14.9	8.9	6.3	13.4	11.8	6.7	16.1
	合計			3歳児～5歳児			3歳児 ～ 5歳児比率		
	男児	女児	総計	男児	女児	総計			
N	226	226	226	226	226	226	226		
合計数	11,201	10,102	21,303	7,453	6,555	14,008			
平均値	49.6	44.7	94.3	33.0	29.0	62.0	66.3%		
標準偏差	33.3	25.6	55.9	25.1	17.0	39.0	11.6%		



### 3・1・2. 職員数

職員数を表4に示した。施設長1.0±0.1名、主任1.2±0.4名、クラス担任12.4±7.8名、フリー1.7±2.2名、その他職員6.4±6.2名、そして、合計22.0±12.4名であった。

表4. 職員数

	施設長	主任	クラス担任	フリー	その他職員	合計
n	236	225	232	191	230	236
総数	239	271	2,883	328	1,462	5,183
平均値	1.0	1.2	12.4	1.7	6.4	22.0
標準偏差	0.1	0.4	7.8	2.2	6.2	12.4

### 3・1・3. 保育室数

保育室数を表5に示した。保育室4.9±2.6室、乳児室1.7±1.1室、その他2.6±1.9室、そして、合計8.8±3.9室であった。

表5. 施設規模別施設概要(保育室数)

	保育室	乳児室	その他	合計
n	231	224	205	233
総数	1,128	386	534	2,048
平均値	4.9	1.7	2.6	8.8
標準偏差	2.6	1.1	1.9	3.9

### 3・1・4. 実施行事

保育所における実施行事を表6に示した。遠足233件(96.7%)、運動会234件(97.1%)、遊戯会202件(83.8%)、宿泊行事23件(9.5%)、端午の節句136件(56.4%)、七夕216件(89.6%)、夏祭り184件(76.3%)、クリスマス222件(92.1%)、雛祭り178件(73.9%)、他園交流147件(61.0%)、他学校交流188件(78.0%)、地域交流190件(78.8%)、そして、その他79件(32.8%)であった。その他の詳細については以下の行事があげられていた。

安全行事：避難訓練、交通安全教室

運動・スポーツ系行事：サッカー教室、泥んこ遊び

季節行事：十五夜、餅つき、節分の豆まき、プール開き

芸術鑑賞・創作行事：人形劇観劇、観劇、お話会・読み聞かせ、陶芸体験、木工制作

交流会行事：高校生との交流、高齢者との交流、障がい者との交流、未就園児との交流、放課後児童クラブとの交流

農作業体験・収穫祭：芋ほり、田植え、焼き芋パーティー

料理・食育行事：親子クッキング、給食試食会、お茶会(初釜)

宗教的行事：花祭り

その他：園外保育、保育参観、歓迎会・お別れ会、子育て支援、懇談会、誕生日会

表6. 施設規模別施設概要(行事)

	遠足	運動会	遊戯会	宿泊行事	端午	七夕	夏祭り
N	241	241	241	241	241	241	241
実施保育園	233	234	202	23	136	216	184
割合	96.7%	97.1%	83.8%	9.5%	56.4%	89.6%	76.3%
未回答	1	1	1	1	1	1	1

	クリスマス	雑祭り	他園交流	他学校交流	地域交流	その他
N	241	241	241	241	241	241
実施保育園	222	178	147	188	190	79
割合	92.1%	73.9%	61.0%	78.0%	78.8%	32.8%
未回答	1	1	1	1	1	1

### 3・2. 異年齢児保育について

#### 3・2・1. 異年齢児保育の実施状況

異年齢補遺の実施状況についての結果を表7および図1に示した。普段から行っている106件(44.0%)、特定の時期や行事と連動して、一時的に行っている103件(42.7%)、行っていない22件(9.1%)、その他4件(1.7%)、そして、未回答6件(2.5%)であった。

表7. 異年齢児保育の実施状況

	件数	割合
普段から行っている	106	44.0%
特定の時期や行事と連動して、一時的に行っている	103	42.7%
行っていない	22	9.1%
その他	4	1.7%
未回答	6	2.5%
総計	241	100.0%

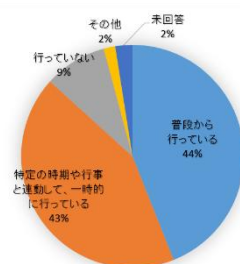


図1. 異年齢児保育実施状況

#### 3・2・2. 場面・行事別異年齢児保育実施状況

場面・行事別異年齢児保育の実施状況についての結果を表8-1・2に示した。まず、普段から異年齢児保育を行っている106施設についてみる{( )内は、その場面・行事がある施設の数}。日常での保育(106施設)は、102施設(96.2%)、給食(106施設)は、91施設(85.8%)、遠足(104施設)は、86施設(82.7%)、運動会(106施設)は、95施設(89.6%)、遊戯会(91施設)は、70施設(76.9%)、宿泊行事(5施設)は、5施設(100.0%)、他園交流(70施設)は、44施設(62.9%)、地域交流(90施設)は、72施設(80.0%)、そして、その他(28施設)は、18施設(64.3%)であった。

次に特定の時期や行事と連動して実施している施設103施設についてみる{( )内は、

その場面・行事がある施設の数}。日常での保育（103施設）は、64施設（62.1%）、給食（103施設）は、62施設（60.2%）、遠足（102施設）は、77施設（75.5%）、運動会（102施設）は、80施設（78.4%）、遊戯会（87施設）は、38施設（43.7%）、宿泊行事（15施設）は、4施設（26.7%）、他園交流（62施設）は、25施設（40.3%）、地域交流（81施設）は、39施設（48.1%）、そして、その他（41施設）は、32施設（78.0%）であった。

表8-1. 異年齢児保育の場面・行事別実施状況(普段から異年齢児保育を行っている施設)

普段から異年齢児保育を行っている施設数		日常	給食	遠足	運動会	遊戯会	宿泊行事	他園交流	地域交流	その他
106施設	行事を実施している施設数	106	106	104	106	91	5	70	90	28
	その行事を異年齢で行っている施設	102	91	86	95	70	5	44	72	18
	割合	96.2%	85.8%	82.7%	89.6%	76.9%	100.0%	62.9%	80.0%	64.3%

表8-2. 異年齢児保育の場面・行事別実施状況(特定の時期や行事と連動して実施している施設)

特定の時期や行事と連動して実施している施設		日常	給食	遠足	運動会	遊戯会	宿泊行事	他園交流	地域交流	その他
103施設	行事を実施している施設数	103	103	102	102	87	15	62	81	41
	その行事を異年齢で行っている施設	64	62	77	80	38	4	25	39	32
	割合	62.1%	60.2%	75.5%	78.4%	43.7%	26.7%	40.3%	48.1%	78.0%

### 3・2・3. 場面・行事別異年齢児保育の組み合わせ

場面・行事別異年齢児保育の組み合わせについての結果を表9-1・2に示した。まず、普段から異年齢児保育を行っている106施設についてみる{( )内は、その場面・行事で異年齢児保育を行っている施設の数}。

日常での保育（102施設）は、3歳児・4歳児の組み合わせ（以下、3歳・4歳と記す）17施設（16.7%）、3歳児・5歳児の組み合わせ（以下、3歳・5歳と記す）9施設（8.8%）、4歳児・5歳児の組み合わせ（以下、4歳・5歳と記す）38施設（37.3%）、そして、3歳児・4歳児・5歳児の組み合わせ（以下、3歳・4歳・5歳と記す）66施設（64.7%）であった。給食（91施設）は、3歳・4歳8施設（8.8%）、3歳・5歳3施設（3.3%）、4歳・5歳36施設（39.6%）、そして、3歳・4歳・5歳56施設（61.5%）であった。遠足（86施設）は、3歳・4歳5施設（5.8%）、3歳・5歳0施設（0.0%）、4歳・5歳17施設（19.8%）、そして、3歳・4歳・5歳63施設（73.3%）であった。運動会（95施設）は、3歳・4歳1施設（1.1%）、3歳・5歳0施設（0.0%）、4歳・5歳12施設（12.6%）、そして、3歳・4歳・5歳81施設（85.3%）であった。遊戯会（70施設）は、3歳・4歳4施設（5.7%）、3歳・5歳0施設（0.0%）、4歳・5歳14施設（20.0%）、そして、3歳・4歳・5歳48施設（68.6%）であった。宿泊行事（5施設）

は、3歳・4歳0施設(0.0%)、3歳・5歳0施設(0.0%)、4歳・5歳2施設(40.0%)、そして、3歳・4歳・5歳0施設(0.0%)であった。他園交流(44施設)は、3歳・4歳0施設(0.0%)、3歳・5歳0施設(0.0%)、4歳・5歳24施設(54.5%)、そして、3歳・4歳・5歳18施設(40.9%)であった。地域交流(72施設)は、3歳・4歳1施設(1.4%)、3歳・5歳0施設(0.0%)、4歳・5歳22施設(30.6%)、そして、3歳・4歳・5歳47施設(65.3%)であった。その他(18施設)は、3歳・4歳1施設(5.6%)、3歳・5歳1施設(5.6%)、4歳・5歳3施設(16.7%)、そして、3歳・4歳・5歳10施設(55.6%)であった。

表9-1. 異年齢児保育の組み合わせ(普段から異年齢児保育を行っている施設)

組み合わせ	日常	給食	遠足	運動会	遊戯会	宿泊行事	他園交流	地域交流	その他	
	102	91	86	95	70	5	44	72	18	
3歳児・4歳児	件数	17	8	5	1	4	0	0	1	1
	割合	16.7%	8.8%	5.8%	1.1%	5.7%	0.0%	0.0%	1.4%	5.6%
3歳児・5歳児	件数	9	3	0	0	0	0	0	0	1
	割合	8.8%	3.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.6%
4歳児・5歳児	件数	38	36	17	12	14	2	24	22	3
	割合	37.3%	39.6%	19.8%	12.6%	20.0%	40.0%	54.5%	30.6%	16.7%
3歳児・4歳児・5歳児	件数	66	56	63	81	48	0	18	47	10
	割合	64.7%	61.5%	73.3%	85.3%	68.6%	0.0%	40.9%	65.3%	55.6%

次に特定の時期や行事と連動して実施している施設103施設についてみる{( )内は、その場面・行事で異年齢児保育を行っている施設の数}。日常での保育(64施設)は、3歳・4歳2施設(3.1%)、3歳・5歳8施設(12.5%)、4歳・5歳14施設(21.9%)、そして、3歳・4歳・5歳51施設(79.7%)であった。給食(62施設)は、3歳・4歳0施設(0.0%)、3歳・5歳3施設(4.8%)、4歳・5歳18施設(29.0%)、そして、3歳・4歳・5歳45施設(72.6%)であった。遠足(77施設)は、3歳・4歳3施設(3.9%)、3歳・5歳2施設(2.6%)、4歳・5歳19施設(24.7%)、そして、3歳・4歳・5歳54施設(70.1%)であった。運動会(80施設)は、3歳・4歳0施設(0.0%)、3歳・5歳1施設(1.3%)、4歳・5歳14施設(17.5%)、そして、3歳・4歳・5歳66施設(82.5%)であった。遊戯会(38施設)は、3歳・4歳0施設(0.0%)、3歳・5歳0施設(0.0%)、4歳・5歳6施設(15.8%)、そして、3歳・4歳・5歳31施設(81.6%)であった。宿泊行事(4施設)は、3歳・4歳0施設(0.0%)、3歳・5歳0施設(0.0%)、4歳・5歳3施設(75.0%)、そして、3歳・4歳・5歳0施設(0.0%)であった。他園交流(25施設)は、3歳・4歳0施設(0.0%)、3歳・5歳0施設(0.0%)、4歳・5歳20施設(80.0%)、そして、3歳・4歳・5歳5施設(20.0%)であった。地域交流(39施設)は、3歳・4歳0施設(0.0%)、3歳・5歳0施設(0.0%)、4歳・5歳11施設(28.2%)、そして、3歳・4歳・5歳27施設(69.2%)であった。その他(32施設)は、3歳・4歳2施設(6.3%)、3歳・5歳0施設(0.0%)、4歳・5歳5施設(15.6%)、そして、3歳・4歳・5歳22施設(68.8%)であった。

表9-2. 異年齢児保育の組み合わせ(特定の時期や行事と連動して実施している施設)

組み合わせ		日常	給食	遠足	運動会	遊戯会	宿泊行事	他園交流	地域交流	その他
		64	62	77	80	38	4	25	39	32
3歳児・4歳児	件数	2	0	3	0	0	0	0	0	2
	割合	3.1%	0.0%	3.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	6.3%
3歳児・5歳児	件数	8	3	2	1	0	0	0	0	0
	割合	12.5%	4.8%	2.6%	1.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
4歳児・5歳児	件数	14	18	19	14	6	3	20	11	5
	割合	21.9%	29.0%	24.7%	17.5%	15.8%	75.0%	80.0%	28.2%	15.6%
3歳児・4歳児・5歳児	件数	51	45	54	66	31	0	5	27	22
	割合	79.7%	72.6%	70.1%	82.5%	81.6%	0.0%	20.0%	69.2%	68.8%

### 3・2・4. 異年齢児保育の導入の経緯について

異年齢児保育の導入の経緯についての結果を表10に示した。自由記述の内容から、以下のカテゴリーに分類して集計を行った。

1. 社会情勢：少子化、兄弟姉妹の減少、一人っ子の増加、核家族
2. 過疎化・園児数減少；地域の過疎化、園児数の減少
3. 成長の促し：優しさ、思いやり、情緒面の成長の促し、身体面の成長の促し
4. 施設事情：保育室の不足、職員の不足
5. 縦のつながり：縦のつながりの充実、人間関係を豊かにする
6. 保育実践：オープンエデュケーション、オープン保育、コーナー保育、解放保育
7. その他：
8. 未導入：
9. 不明：詳細不明、導入の経緯はわからない

社会情勢は、39件（14.2%）、過疎化・園児数減少は、52件（18.9%）、成長の促しは、112件（40.7%）、施設事情は、20件（7.3%）、縦のつながりは、44件（16.0%）、保育実践は、8件（2.9%）、その他は、9件（3.3%）、未導入は、26件（9.5%）、そして、不明は、4件（1.5%）であった。

表10. 異年齢児保育導入の経緯

	件数	割合
社会情勢	39	14.2%
過疎化・園児数減少	52	18.9%
成長の促し	112	40.7%
施設事情	20	7.3%
縦のつながり	44	16.0%
保育実践	8	2.9%
その他	9	3.3%
未導入	26	9.5%
不明	4	1.5%
合計	275	100.0%

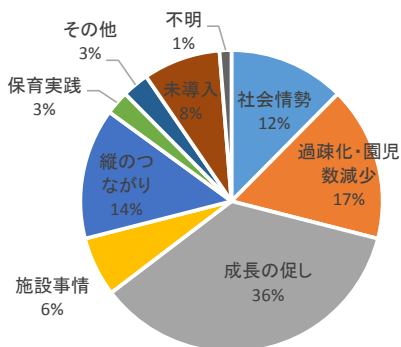


図2. 異年齢児保育の導入の経緯

### 3・2・5. 異年齢児保育実施時の留意点

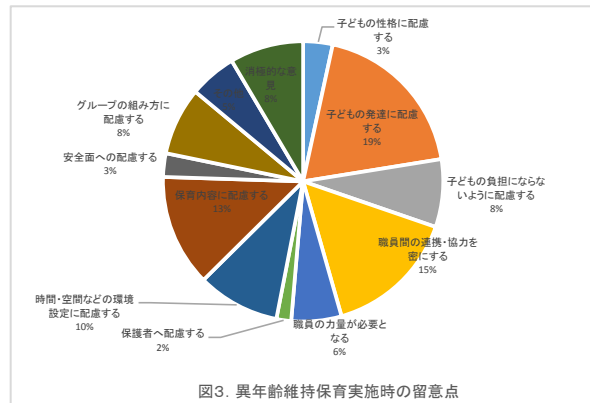
異年齢児保育実施時の留意点についての結果を表11および図3に示した。自由記述の内容から、以下のカテゴリーに分類して集計を行った。

1. 子どもの性格に配慮する
2. 子どもの発達に配慮する
3. 子どもの負担にならないように配慮する
4. 職員間の連携・協力を密にする
5. 職員の力量が必要となる
6. 保護者へ配慮する
7. 時間・空間などの環境設定に配慮する
8. 保育内容に配慮する
9. 安全面への配慮する
10. グループの組み方に配慮する
11. その他
12. 消極的な意見

子どもの性格に配慮するは、10件（4.9%）、子どもの発達に配慮するは、56件（27.3%）、子どもの負担にならないように配慮するは、23件（11.2%）、職員間の連携・協力を密にするは、45件（22.0%）、職員の力量が必要となるは、17件（8.3%）、保護者へ配慮するは、5件（2.4%）、時間・空間などの環境設定に配慮するは、28件（13.7%）、保育内容に配慮するは、38件（18.5%）、安全面へ配慮するは、8件（3.9%）、グループの組み方に配慮するは、23件（11.2%）、その他は、16件（7.8%）、消極的な意見は、25件（12.2%）であった。

表11. 異年齢保育実施時の留意点

	件数	割合
子どもの性格に配慮する	10	4.9%
子どもの発達に配慮する	56	27.3%
子どもの負担にならないように配慮する	23	11.2%
職員間の連携・協力を密にする	45	22.0%
職員の力量が必要となる	17	8.3%
保護者へ配慮する	5	2.4%
時間・空間などの環境設定に配慮する	28	13.7%
保育内容に配慮する	38	18.5%
安全面への配慮する	8	3.9%
グループの組み方に配慮する	23	11.2%
その他	16	7.8%
消極的な意見	25	12.2%
合計	205	100.0%



#### 4. 結果（主任用）

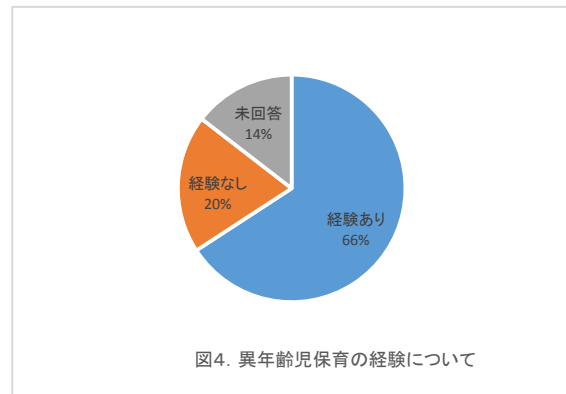
##### 4・1. 異年齢児保育について

##### 4・1・1. 異年齢児保育の経験について

主任における異年齢児保育の経験についての結果を表12および図4に示した。経験ありは、154件（65.8%）で、経験なしは、46件（19.7%）、そして、未回答は、34件（14.5%）であった。

表12. 異年齢児保育経験について

	件数	割合
経験あり	154	65.8%
経験なし	46	19.7%
未回答	34	14.5%
総計	234	100.0%

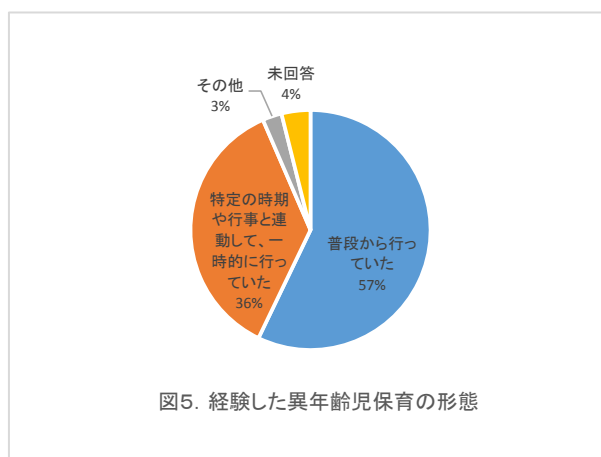


##### 4・1・2. 経験した異年齢児保育の形態について

経験した異年齢児保育の形態についての結果を表13および図5に示した。普段から行っている88件（57.1%）、特定の時期や行事と連動して、一時的に行っている56件（36.4%）、その他4件（2.6%）、そして、未回答6件（3.9%）であった。

表13. 経験した異年齢児保育の形態

形態	件数	割合
普段から行っていた	88	57.1%
特定の時期や行事と連動して、一時的に行っていた	56	36.4%
その他	4	2.6%
未回答	6	3.9%
総計	154	100.0%

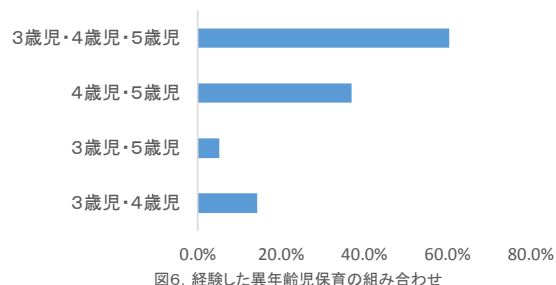


#### 4・1・3. 経験した異年齢児保育の組み合わせについて

経験した異年齢児保育の組み合わせについての結果を表14および図6に示した。3歳・4歳は、22件（14.3%）、3歳・5歳は、8件（5.2%）、4歳・5歳は、57件（37.0%）、そして、3歳・4歳・5歳は、93件（60.4%）であった。

表14. 経験した異年齢児保育の組み合わせ

組み合わせ	件数	割合
3歳児・4歳児	22	14.3%
3歳児・5歳児	8	5.2%
4歳児・5歳児	57	37.0%
3歳児・4歳児・5歳児	93	60.4%



#### 4・1・4. 異年齢児保育の必要性について

異年齢児保育の必要性についての結果を表15および図7に示した。必要だと思うは、72件（30.8%）、ある程度必要だと思うは、119件（50.9%）、どちらともいえないは、20件（8.5%）、それほど必要だと思わないは、6件（2.6%）、必要とは思わないは、1件（0.4%）、そして、未回答は、16件（6.8%）であった。



表15. 異年齢児保育の必要性

	件数	割合
必要だと思う	72	30.8%
ある程度必要だと思う	119	50.9%
どちらともいえない	20	8.5%
それほど必要とは思わない	6	2.6%
必要とは思わない	1	0.4%
未回答	16	6.8%
総計	234	100.0%

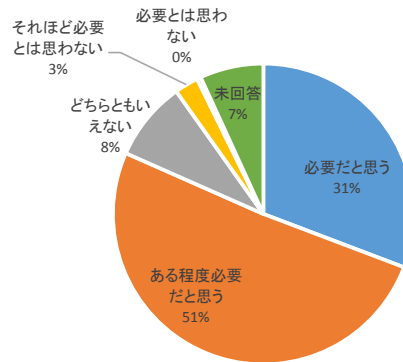


図7. 異年齢児保育の必要性について

#### 4・1・5. 必要性についての理由

必要性の理由についての結果についてみる。必要性における肯定的回答の自由記述を下記に示した。

##### ✚ 肯定的回答の理由

- ・異年齢児保育は必要だと思う。兄弟姉妹が少ない、または一人っ子などは年長年少の友達からの様々な刺激は発達の段階で大切なことだと思う。
- ・年齢による枠組みにとらわれず伸びやかさがある。子ども達に遊びを通して育てたい自主性や積極性、善悪などができるようになるには保育士の語りかけで育つのではなく、子ども同士の遊びの中で、肌で感じとっていくことが多く、必要であると思う。
- ・互いの姿を見合い憧れの気持ちやいとおしむ気持ちをもてる。
- ・ひとりひとりの力を発揮できる場としても大切な経験だと思っている。人と関わる心地よさを味わって行ける場となっている。
- ・少子化に伴い家庭では自分より年長年少の子ども同士で遊ぶあるいは喧嘩になることなど経験できる子が減少している。
- ・実際に担任をして、子ども達の育ちにおいてプラスに働いていることが多いと感じたから。
- ・普段の生活では、異年齢と関わる子もいるが、全く関わらない子もいるので、機会を作ることで関わりを持ってほしいと思う。異年齢と関わる中では、高年齢児は自然と低年齢児を気にかけて、優しく関わったり、声をかけたりして、思いやりが持てたり、また、低年齢児はそのなかで憧れを持ったり、互いに刺激し合えると思う。
- ・家庭での兄弟の順番は変えられないが、保育所では小さい年齢から年を重ねていき、自分がしてもらったことを自然な形で教えたり、やってあげたりができ、一人っ子にも兄、姉になったり、妹、弟を経験できるので、非常にいいと思う。
- ・年長さんにあこがれる気持ちを持ったり、年少児を思いやる気持ちを持ったりすること

が出来る。クラスの中で居場所がみつけれない時に頼られたりすることが自信へとつながる。

- ・異年齢と一緒に遊ぶ中で遊び方を伝えたり、上の子の真似をする。社会のルールや人間関係などあらゆることを学んでいく。

- ・普段から異年齢の交流を行うと自然に大きい子は小さい子に対していたわりの心や優しさを感じ、小さい子はいろんなことをやってみようという意欲が持て、全体が家庭的な雰囲気になると思う。

- ・子ども達同士で解決しようという自立心が芽生えたり、年長児を頼ったり、年少児を助けたりと大切なことを体験できる。

- ・年長児は自分より小さい子達との接し方を体験でき、お世話をすることで、自分自身の成長へつながる。年少児は年長児の姿を見て真似して成長できる。

- ・子どもの心を育てるにあたり必要だと思う。お世話したり、されたりと普段見られない行動が見られ、小さいながらに成長が感じられる。

- ・近年一人っ子を含め兄弟姉妹の数も減少してきているので、異年齢の友達と関わる機会は情緒面の安定、社会性の発達においても必要だと思う。

- ・自分と同じ年齢の子と過ごすことも大事であるが、違った年齢児と接することによって相手のことを思いやったり、すごいと憧れの気持ちを持たせたりすることは発達の上で大きな役割であると思う。

- ・子ども達を取り巻く環境で人間関係の希薄さからもあえて関わり合える場づくりを大切にして、共に育ちあうことを目指したいと思う。

- ・自分より小さい子への接し方を知ったり、大きい子の姿に憧れたりして、意欲的になったり、優しさを感じたり、自分がしてもらったことを次は誰かに・・・といった体験も大切にしたいため。

- ・年齢が大きい子も小さい子も互いに影響し合っていることを知ってほしいと思うし、成長してから人や社会との関わりにおいて異年齢児保育の体験が活かされると思う。

- ・少子化により兄弟関係を経験せずに成長する子どもが増え続けている中、さまざまな年齢の子どもが過ごす場である保育園という環境を生かし、豊かな人間関係を築くために必要だと思う。

- ・特に最近では、兄弟もなかったり、家へ帰ってからも近所の子と遊ぶ機会もなく、異年齢児とのふれあいを自然に持てる状況下でないから意識的に保育所では取り組むと良いと思う。

- ・小さいクラスの子どもは、大きい子どものクラスの子どもの姿をしっかりとみている。その為、大きいクラスになった時、同じように真似をして接している。また、大きいクラスの子どもも小さい子への思いやる気持ちが育っていくと思う。

- ・少子化の時代になってきているので、縦の繋がりを大切にしていかななくてはならないの

ではないかと思う。

- ・同年齢になり体験により、思いやりの心が育ったり、子ども同士の中で学びあえることもたくさんあると思う。

- ・発達の違う子ども同士のふれ合いを大切にし、共に生活していく中で感じることを、考えることを経験してほしい。

- ・同年齢だけでなく、異年齢児が交流をもつことで、思いやりや優しさの気持ちが自然と育つと思う。

- ・異年齢児とともに過ごす中で大切にされる、憧れる気持ちを持つ。いたわりや優しい気持ちを持つなどの心育て。様々な刺激において意欲がもてたり刺激を受けたり、自信になげたりできる。

- ・日常の生活の中ではいろいろな年齢の人との関わりが必要である。自然の流れで異年齢児保育は当然あってもよいと思う。

- ・異年齢児と触れ合うことで、自分の考えだけでは通じないこと、どうしたら一緒に楽しめるか考えていくことができる。

- ・少子化で兄弟姉妹がいない。近所にも子どもがいない。近所とのかかわりも少ない時代、人とかかわりや優しさを身につけるのに必要

- ・憧れや、小さい子を気にかける姿が見られ、縦のつながりが大切

- ・大きい子が自信をもち、いたわる気持ちがもてる。小さい子は見本となりあこがれになって次につながる。

- ・やってみたい気持ちが生まれる。どうしたらできるか考える力を培う。子ども達の応援や助けがありつながりが生まれる。達成感や挑戦する気持ち、自信や自尊感情への影響がある。

- ・少子化が進み兄弟の関係が家庭内だけでは不足し、兄弟関係からはぐくまれる、思いやりやあこがれなど子どもの気持ち、心の成長に必要な感情が家庭内だけでは少なくなってきたから。

- ・各家族、少子化という中で、異年齢ということで、同年齢だけの関わりだけでなく、異年齢で生活する事によって、色々な関わりをする事ができると思う。生活していく中で、色々な関係をしていく事ができる（小さい子は刺激を受け、年長児は思いやる等）。

- ・少子化という環境の中で、子ども達の成長発達に重要な遊びの集団をつくるには保育園の縦のつながりの環境の中でこそ、尊敬やいたわり、知識や技術の発達が保障できると思われる。

- ・年長児クラスの発達が保障される中で大きい子が小さい子へのいたわりや面倒をみてもらえることでの小さい子が大きい子へのあこがれをもつなど・・・子どもも少なくなっているので異年齢のかかわりは特に大切だと思う。

- ・異年齢児と関わる機会が少なく、関係性が広がらない。やはり多様な年齢の中で自己発

揮する場が必要であると感じる

- ・毎日の保育だと年齢に合わせた保障が難しいように思うが、周りの友達に関心を持ち、気持ちに気づいたり、行動する力につながっていくと思う
- ・日常保育では基本的に年齢別保育が理想だと思う。その中で、ねらいをもって定期的に異年齢保育を取り入れることも大事だと思う。
- ・核家族化、少子化によって異年齢との関わりがない子もいる。関わる中で、してもらった喜びや小さな子に対するいたわりや接し方の知る機会になる。
- ・異年齢保育は大切だが、各年齢の発達をおさえた関わり、保育が大切だと思う。上は下の手本となり、下は上を見て育つうえで、互いに良い刺激となって成長する意味では必要と感じる。
- ・同年齢での活動をしっかりとしたうえで、異年齢保育をしていくことが望ましいと感じています。
- ・異年齢で遊ぶことにより、自然に子ども同士のつながりが生まれお互いを思いやる姿がみられるようになった。
- ・兄弟数が減っている中では必要な関わりであると思う。ただ、行事等の時には保育士がうまく時間配分計画をたてないと子どもを急がしてしまうようにも思う。
- ・家庭においても子どもの数が少なくなっている中で、異年齢に関わる機会を意図して作らなければならないのではと感じている。
- ・お互いをいたわり合ったり、認める気持ちが持てよいと思う。時には各年齢に分かれていた方がそれぞれに合った保育がしやすくいいと思う。
- ・人と人とのつながりが希薄となってきている時代でもあり、兄弟姉妹も少なくなっていることから、異年齢の交流が持てる。また、担任だけでなく、担任外の職員とも交流できる利点がある。
- ・同年齢の集団の中で、固定化した力関係やその子の見方などを変えられる機会になると思う。
- ・一人っ子など兄弟がいなく、異年齢児との関わる経験のない子もいるため、生活するうえで、よい経験だと思う。
- ・少子化により家庭や保育園でも子ども達同士で関わる機会が以前に比べて減っている。異年齢の友達と関わることで「してもらってうれしい」「〇〇君みたいになりたい」等の同年齢の中では経験できないことが経験できるから。
- ・年齢として集団で活動できる年齢は4歳以上で、3歳児クラスまでは異年齢にすると上の子が下の子に対する負担が大きくなり、本来やりたい活動が出来なくなると思う。4、5歳になれば異年齢児保育に対するメリットがあると思う。
- ・核家族や少子化が進む中、昔の様に家庭や地域で異年齢の子どもと関わる機会が少なくなっています。大きい子が小さい子の面倒をみたり、小さい子が大きい子のすること

を真似したり、そのような関わりの中から思いやりの気持ちや感謝の気持ちなどを育むことが出来る。

・ずっと異年齢ばかりしているのではなく、時にはその年齢だけの活動も大切にしながら保育していくとよいと思う。大きい子から刺激を受けて憧れを持ったり、小さい子をいたわったり、かわいがるということが素晴らしい経験となるであろう。

・異年齢を思いやる気持ちや優しさ、また、お兄さん、お姉さんを頼る安心さなど必要だから。少子化では育ちにくくなってきた。

・兄弟姉妹が少なくなっているので、ある程度関わる機会があるのはよいことだと思う。

・少子化で兄弟も少なくなっていることもあるので、一緒に過ごす意味はあると思うが、年齢が違くと無理もあると思う。

・異年齢児保育では一緒に活動することにより、刺激し合い良い面もあるが、それぞれの活動をじっくりとした方がよい時もあると思う。

・集団生活をするうえで育ちあうという面では見て育つことも多い。同じ部屋にいないとわからないこともあるので、ずっと一緒ではなく、クラスが落ち着いた頃にして高め合うこともよいと思われる。助け合い、協力し合う気持ちを育てることでは必要だと思う。

・年少児をいたわる気持ちを育てることや年長をみて子ども達なりに憧れたり、学ぶことも多いと思うので、ある程度必要。

・せっかく0～6歳までの園児がおり、現代社会においても少子化が進み兄弟姉妹のいない子もいるので、縦のつながりを経験することは大切

・少子化により兄弟の少ない家庭が多い、現状で異年齢保育を必要と思うこともある。

・異年齢児と過ごすことによって得られることが多くあるので必要だと思うが、各年齢のねらいを持った同年齢の保育も大切だと思う。

・異年齢児が混ざり合うことで同年齢では経験できない小さい子への思いやりや世話をすることで自信をつけることが出来るが、協調性が育つのは同年齢保育だと思う。

・同年齢の関わりで育つ部分と異年齢保育で育つ部分があると思うから

・小さい子に思いやりの気持ちや大きな友達への憧れ等よい刺激となり育ちあうと思う。

・兄弟の数も少なく、地域での異年齢集団でのかわりも消失した今、年齢の子となる子どもとの関わりを持つことで相手に合わせる、思いやる、頼られる経験ができる。

・兄弟が少なくなった今は3、4、5歳だけでなく、年齢差がある異年齢児集団も必要になってくると思う。

・互いに学びあう機会が多い。少子化に伴い異年齢での関わりが少ないことから

・兄弟数も少なくなっており、異年齢児と交流する機会が少なくなっているため、意図的に交流を持つ機会は必要だと思う。

・各年齢同士の関わりだけでなく、異年齢児となると縦の繋がりがひろがり、お互いに良い刺激ともなっていくと思います。

- ・互いに育ちあうことが良いと思うが、異年齢が望ましい場面とそうでない場面があると思う。
- ・現在、核家族が多くなり、子どもの人数も減ってきている中、集団で育つことも多いため異年齢での保育は必要だと思う。
- ・小さい子は大きい子から刺激を受ける。小さい子に対して思いやりや助け合いの気持ちが芽生える。一人っ子が多くなってきて、異年齢児との関わりをもつ機会が少ない。
- ・小さい子を思いやりたり出来ないことを手伝ってあげたり思いやりの気持ちが育つ
- ・園以外の場所で異年齢児がかかわって過ごす機会が減ってきていると思うので（兄弟数の減少、自宅近所に子どもがいないなど）
- ・年齢の小さい子が大きい子の真似をして自然に覚えていけたり、やる気もてるし、大きい子も小さい子に対する思いやりの気持ちが持てる。ただ手助けしすぎてしまうことなどもあり、同年齢で自立を計ることも必要だと思う。
- ・少子化の中、大きい子から学んだり小さい子に優しくしたりすることが集団（保育園）の中で出来るため
- ・毎日必要ではないが、行事などの時などに随時取り入れていくことは必要であると考え
- ・兄弟が少なかったり、近所の異年齢の子ども達との交流が少なくなりつつある現況の中でせつかく異年齢の子ども達と同じ保育園で生活しているのですから交流を持ち大きい子は小さい子のお世話をし、小さい子は大きい子のしてくれることに憧れや興味を持つことは大切なことだと思う。
- ・近年、出産率の低下により兄弟姉妹が減ってきていることで異年齢児との関りが大切な経験であると思う。ただ、全く同じ活動、同じ部屋になると発達の違う子ども達なのでやはり活動は別々にすべきだと思う。
- ・異年齢と交流することにより、園生活に風を吹き込み別視点から子どもをみることが出来る。
- ・人との触れ合いを育み思いやり優しさなど育つのに適していると思うが、就学前の児童に育ってほしいと思われることは異年齢児保育にはあわないと思う。
- ・異年齢での関わり方がわからない子がいるので（兄弟がいない子が増えてきている）
- ・まったく無くなってしまうと、小さい子への思いやりや大きい子に憧れる姿が見られないので、ある程度はあったほうがよいと思う。
- ・さまざまな友だちと関わる機会を持つことで、経験も増え遊ぶこと得る事が多くなると思う。
- ・兄弟姉妹が少ない現状があるので、必要性を感じるが年齢別の保育も必要だと思う。
- ・年齢に応じての関わり方が経験できることで成長を実感したり、自己肯定感も育つと思われる。

- ・各年齢でクラス意識や共通の目標を持って取り組んだり、みんなと一緒にやろうという仲間作りは大事であり、異年齢でお互いが刺激をもらい育ちあえることも大事であると思う。
- ・異年齢の中にいると、自然に年少児のことを世話したり、思いやる気持ちが育つと思う。
- ・上の子は下の子を見るのも時には必要かと思う。慕い慕われ、上下関係が良い感じで育つ。
- ・兄弟が少ない家庭が多い。異年齢で関わる中で小さな子は上の子の真似をしてみたり、あこがれを持ち、挑戦する意欲などが持てる。大きな子は小さな子に関わる中で、いたわる気持ちや優しさを持てるように思う。
- ・感謝し、いたわり、譲り合う心を持つ子どもに成長すると感じられる。
- ・兄弟が少なくなっているので、異年齢で生活すると小さい子への優しい気持ちが育ったり、いろんな人とどのようにかかわったらいいのかなどが学べるので必要だと思う。
- ・異年齢児保育は必要だと思うが、すべて一緒ではなく、発達に応じた年齢をおさえた活動を取り入れた保育をすることも必要
- ・年長児は年少児に思いやりの気持ちを持ち、年少児は憧れの気持ちを持つことで、大きくなるのが楽しみになり希望がもてる。
- ・兄弟の減少により、保育園で異年齢児とのかかわりを体験させるのは良いことだと思う。
- ・してもらい、してあげる関係ができたり、刺激を受けることで成長していく。
- ・子どもの人数にもよると思うが、まず同年齢のクラスの子の保育をしっかりと行い、その上で異年齢児の保育も行っていくことが大切だと思う。
- ・いつもという必要はないと思うが、異年齢でのかかわりを意図的に持っていくことは必要がある。
- ・少人数のクラスなら、とくに年齢だけにとらわれず、異年齢で過ごすことによって得られる兄弟関係のようなかかわりができるようになる。子どもの減少により、異年齢保育は子どもにとってはいい経験ができる。
- ・まずは同年齢での保育を大切にしていきたいが、同年齢での関係がしっかりできてきたら、異年齢の刺激を受けることも発達の助けにもなると思う。
- ・異年齢から学ぶ事も多い。その反面年齢に合わせた保育も大切にしていきたい。
- ・少子化や地域との交流が少なくなった今、同年齢だけでなく異年齢で身につくことも多くあると思う。意図的にそういう場を作る必要があるのではないかと思う。
- ・異年齢児と接する機会が減ってきているので、異年齢保育をとおしていろいろな経験をしながら、やさしさや思いやりなどを育てていく必要があると思う。
- ・年長児が年少児達に世話をやいたりして思いやりの気持ちを育てる場として良いと思う。
- ・兄弟数が少ない中、意図的に異年齢が一緒になった保育を受ける影響が大切だと思う。
- ・思いやりの心が育つ。少子化の中で異年齢の子どもと触れ合う機会を意図的に作ること

は大切だと思う。

・日常保育では基本的に年齢別保育が理想だと思う。その中で、ねらいをもって定期的に異年齢保育を取り入れることも大事だと思う。

・核家族化、少子化によって異年齢との関わりがない子もいる。関わる中で、してもらった喜びや小さな子に対するいたわりや接し方の知る機会になる。

・兄弟や近所との付き合いの減少でよい体験になる。

・兄弟で入園のケースが多く、異年齢での活動も必要であるが、無理にこだわる必要もない。

・1人っ子等兄弟の関係が薄れてきている。小さい子が大きい子への頼もしさを感じる

・異年齢での遊びや活動で関わりを深め、自信や憧れをもつ。

・地域の中でのつながりがすくなく、縦の繋がりもへっている。

・子ども達の自然な学びが多い。就学前の時期では同年齢での学びもあり、常に異年齢保育の必要はない。

・兄弟が少なくなってきたおり異年齢で触れ合う機会は大切。

・いろいろな友だちと触れ合い、感じたり、培われるものがある。地域の中でも縦の繋がりを大切にしてほしい。

・兄弟入所が多いので、異年齢児保育も必要と思うが、無理にこだわらなくても良いとも思う。

・年長児から教わる事も多く、憧れという気持ちを持つ事で、積極性や意欲が育つ。また、お互いを思いやる心も育つと思う。

・少子化の中、長時間保育を受ける上で自然に、思いやりの育つ環境にふれられるから。

・各家庭で兄弟を持つ家族が少なくなっており年長児になれば他児の世話をしたり思いやったりする場面は非常に大切だと思う。保育園の特徴として乳児と接する事ができるため、機会を増やしていきたい。

・行事が多い中、クラス活動も大切なので一時的にしかなかかなか時間が持てないのが現状です。

・保護者の理解が大切であり、厳しい。

・異年齢の中で育つもの、同学年の中で育つもの、どちらも大切だと思う。日常の生活が常に「異年齢」になっていると同学年の中での保育活動が保障しにくい。

・兄弟数が少なくなっている今、異年齢で過ごす機会も少なくなっているため、ある程度、意図的に取り組む必要性を感じる。

・設定的な異年齢児保育が不可欠ということでもないと思う。保育所には0歳から5歳までの園児がいて顔を合わす機会があり、自然な空間の中で過ごす事で、交流がもてていると思う。その上で意識的に時間をもてば交流する楽しさを感じるきっかけになると思う。

・保育所外で異年齢交流のできる環境が少なくなっている。また、1人っ子も多く家



庭内でも異年齢でかかわる機会のない子もいるため。

- ・ 同年齢ばかりの関係では、自己主張しすぎたり、トラブルが多い事もあったが、異年齢で過ごす中で小さい子に優しくしてあげたり、少し我慢したりする姿も出てくる。
- ・ 異年齢の関わりはとても大切で、人との関わりを学ぶ場となると思います。
- ・ 縦の関係の中で経験し、身につけていく事も多く、思いやり、自信などの成長にも欠かせないと思う。兄弟も少なく、昔のように帰ってから地域の皆で遊ぶという事も少なくなっている現在、そういう環境を与えてやる事も大切なのではと思う。
- ・ 家族、兄弟関係が薄くなっている現代、縦のつながりは必要だと思う。
- ・ 少子化、地域の子ども集団が希薄になっている。親子関係も父母ではなく、〇〇ちゃん、〇〇君と父母の名前を呼ばせて、表面上、親と子が対等の関係と思っている風潮もある中で、親→子、兄姉→弟妹、年長者→幼い子という縦の関係も大切だと思う。縦の関係の中でそれぞれの立場の役割を知ったり、あこがれ、敬意の念をもったりする機会となる。
- ・ 異年齢児保育の中で小さい年齢の子への思いやりや運動会などの行事で一緒にやりとげた。達成感が味わえる。
- ・ 集団生活の中で異年齢児とかかわり、刺激を受けたり、模倣したり、プラスになる面が多いと思うから。
- ・ 少子化となり家庭内での異年齢の子ども同士の関わる機会が少なかったり、ない状況があるため。
- ・ 大きい子が小さい子のお世話をしたり、小さい子が大きい子の様子を見ながら学んだりできるから。

異年齢児保育の必要性について、どちらとも言えないの自由記述を以下に示した。

#### ✚ どちらとも言えない理由

- ・ 必要か否かの問題ではなく、人数が少なければ異年齢児保育をせざるをえない。
- ・ 長所も短所もあり必ず必要とはいいがたいところがある。それぞれの年齢に合った遊びや活動をしようと思っても混合になってしまうと幾通りかのカリキュラムを立てなければならず難しいようにも思う。
- ・ 以前から給食、生活場面では異年齢児保育で過ごしているため、子ども達同士のつながりはあり、日常での保育も異年齢児保育になったが、以前と変わらないように思う。
- ・ それぞれの良さもあるので一概にはいえない。
- ・ 年長児が年少児を大切に思い、優しく接することが出来る機会は大切だが、あらためて異年齢児保育を設定しなくても日頃、早朝、延長保育、園行事、遊びの中で十分関わりが持てる機会があるので特に必要ない。
- ・ 一日一日異年齢児保育をするのではなく、部分的に機会があれば交流を持てれば良いと思う。

- ・自園では普段から自然な形で交流があり、あえてしなくてもかかわりの中で大きい子の姿を見てまねをしたり、小さい子に優しくする姿がある。年齢別の活動を大事にしたいと考えている。
- ・ケースバイケースだと思う。何を大切にしようという保育をするのが大切で、子どもの姿に見合った異年齢児保育をするべきだと思う。
- ・大きい子を見て小さい子が育っていく面、又大きい子がいたわれる面は良いが、保育の年齢差を考えると大変。
- ・早朝、延長保育、夕方の保育などで一緒に過ごす時間があるので、その中で触れ合うことが出来る。園の規模や環境によってうまく出来る場合と難しい場合があると思うのでどちらともいえない。
- ・園により幼児クラスの人数が少数であったり、部屋の都合などにより異年齢児保育になることもある。遅番、早番、行事などで自然な関りが出来ていることもある。
- ・異年齢児保育だと各学年の活動が思うようにならない時がある。
- ・お互い刺激し合えるという良い面もあるが、同じ年齢の集団の中で成長していくというのは、とても大切な事である。
- ・一長一短。どちらも良さと思えるべき部分もあり。
- ・異年齢児保育を経験していないのでわからない。
- ・年齢的に刺激し合わないことはないと思うが、それぞれの年齢に合わせて、個々のかかわりの方が年齢的に大切だと感じる部分もあるため。
- ・子どもの様子を見て、年齢別でした方がよいのか、異年齢児保育の方がいいのか・・・その子ども達の状態を考えたい。

異年齢児保育の必要性について、否定的回答の自由記述を以下に示した。

#### ✚ 否定的回答の理由

- ・子どもが戸外や室内遊びの中で自然に交流しながら中を深める方がいいと思う。
- ・少子化やゲーム機などの普及により、自分の思い通りになる生活となりやすく、自己中心的な様子が根強く残る傾向を感じ、親も子どもの機嫌を取って子どもに流されているような家庭もある。考えると異年齢児保育も大切だと思うが、1日中というより、一時的に行っただけでもよさそうに思う。
- ・年々子ども達の姿を見てみると、同年齢でも家庭環境によって発達に差が見られます。その為、まずは同年齢の保育を大切にしていき、生活の基盤をつけていく。
- ・設定されて異年齢児保育するのではなく、普段からの遊びや関わりの中で自然と交流する事が大切でないかと思う。
- ・やむをえず異年齢保育をしたりする園もあるが、発達をおさえた保育のむずかしさも感じる。ただ、年間をとおして定期的な異年齢保育（チームを作ったり）は園全体でしっか

り話をし、取り組むなら、いろいろな効果は期待できる。

- ・ 同年齢保育の中でも生活・遊びを通じて異年齢でのふれあいは可能だから。
- ・ 同年齢クラスを基本とした異年齢交流や夏クラスの交流はよいと思う。

## 5. まとめ

三重県における異年齢児保育は多くの保育園で実施されていた。しかし、その実施方法や導入の経緯は様々であった。また、現場の保育士の意識では、8割が異年齢児保育は必要と回答しているが、個々の発達をおさえた保育ができにくいなどの問題点もあげられた。今後、さらに調査を進め、異年齢児保育の効果について検証していく。本調査より、以下の結果が得られた。

1. 三重県内の保育所425施設に異年齢児保育に関する質問紙調査を送付し、241施設より回答を得た。（回収率56.5%）
2. 保育所の規模は、園児数121名以上の超大規模施設が66施設（27.4%）、91名以上120名以下の大規模施設が49施設（20.3%）、61名以上119名以下の中規模施設が46施設（19.1%）、60名以下の小規模施設が65施設（27.0%）、不明15施設（6.2%）であった。
3. 多くの保育所が実施している行事は、運動会234件（97.1%）、遠足233件（96.7%）、クリスマス222件（92.1%）、七夕216件（89.6%）、遊戯会202件（83.8%）であった。
4. 異年齢児保育の実施状況については、普段から行っている106件（44.0%）、特定の時期や行事と連動して、一時的に行っている103件（42.7%）、行っていない22件（9.1%）、その他4件（1.7%）、そして、未回答6件（2.5%）であった。
5. 異年齢児保育の導入の経緯は、異年齢児保育の導入経緯は、「成長の促しを期待して」112件（40.7%）が最も多く、次いで、「過疎化・園児数減少により」52件（18.9%）、「縦のつながりを強くする」44件（16.0%）であった。
6. 異年齢児保育を実施するにあたっての留意点は、「子どもの発達に配慮する」56件（27.3%）で最も多く、次いで「職員間の連携・協力を密にする」45件（22.0%）であった。
7. 保育の現場で働いている主任における異年齢児保育の必要性は、「必要だと思う」72件（30.8%）、「ある程度必要だと思う」119件（50.9%）、「どちらともいえない」20件（8.5%）、「それほど必要だと思わない」6件（2.6%）、「必要とは思わない」1件（0.4%）であり、8割が必要性を感じていた。
8. 必要性の回答に関する理由について、肯定的意見としては、子どもの心情的発達を期待する意見が多かった。否定的意見としては、同年齢の保育を大切にしていける方がよい、発達をおさえた保育が難しいとの意見がみられた。

以上の結果より、三重県の保育所における「異年齢児保育」は多くの施設で実施されて

いるが、その実施形態や年齢の組み合わせはさまざまであった。また、異年齢児保育の必要性については、8割の主任保育士が肯定的であったが、否定的意見として、発達をおさえた保育の必要性を指摘するものやすべてを異年齢で行うのではなく、同年齢での関わりも必要との意見がみられた。

今後、これらの結果をもとに、クラス担任の質問紙調査の結果もあわせて、地域性、公立私立別、規模別などさまざまな視点から分析を行い、異年齢児保育を行うことの意義や問題点について考察をしていくこととする。

#### 引用・参考文献

- 秋山和夫（1985）縦割り保育とは，保育学大辞典 第2巻，第一法規，pp. 245-246
- 藤森平司（2000）たてわりではない異年齢児保育 21世紀型保育のススメ，世界文化社
- 舟木哲朗（1985）たてわり保育，乳幼児発達事典，岩崎学術出版社，pp. 325
- 石川拓次（2014）第6章 こどもの健康についての一考察 —放課後児童クラブの異年齢集団の活動に着目して—，生活コミュニケーション，あむる
- 宮里六郎（2001）異年齢保育実践の課題と「保育計画」づくり，季刊保育問題研究，190，pp. 86-101
- 村山貞雄（1980）混合保育，幼児保育学辞典，明治図書，pp. 257-258
- 塩路晶子，佐々木弘子（2005）異年齢交流の視点から見た乳幼児保育—0歳から6歳までの子どもの育ちを見通すために—，鳴門教育大学研究紀要（教育科学編），20，pp. 103-111
- 田代和美（2004）異年齢保育，保育用語事典 第3版，ミネルヴァ書房，pp. 109
- 坪井敏純，山口郁（2005）異年齢保育の中の子どもたち，鹿児島女子短期大学附属南九州地域科学研究所報，21，pp. 1-10